

## 名詞形成接尾辞サについて

西 尾 寅 弥

### 一 はじめに

小稿において筆者が接尾辞サに興味をもち、調べようとした動機は、まずそれのもつ、接辞としての「生産力」の広汎さ、旺盛さに注目される点にある。現代日本語の語構成研究において、一般に和語系の接尾辞は「造語力」の乏しいものが多く、「**的**、**性**、**化**」のような漢語系の接尾辞の活躍が目立つといわれている。しかし、そういう傾向の中であって、サのもつ造語力の広さ、強さは注目に値すると思う。現代語におけるサの働き方、使われ方を、いろいろな観点からその使用例によって観察し、現在から今後にわたって、日本語の語彙とその形成の中でサのもちうる可能性について考えてみたい。ずっと以前に「やまとことばの可能性」(文獻15)という小文の中でこの問題にかんたんに言及したが、今回はこれを主題にして、よりくわしい考察を試みることにした。

用例は、各種の多様な文例が共存している、手近な資料として新聞から採集したものをおもに使った。朝日新聞の、平成六年八月から十一月にかけてのものがいちばん多くなった。年月日などは煩をさけて省略し、署名入り記事でも筆者名をあげなかった。見出しのことは、条件の異なった表現とみて、(見)という記号をつけて他と区別

した。新聞以外の資料からの文例には(他)と記した。  
なお、接尾辞サによる形容詞などからの派生名詞を、以下「**ーさ**」と略記することにする。

### 二 「**ーさ**」についての種々の面からの観察

接尾辞サの働きについて、森田(一九八〇)の冒頭に

多くの形容詞・形容動詞の語幹について、状態的なものを程度概念の名詞に変える働きを持つ。

と要約されている。この規定の前半にあたる、サのつきうる範囲、後半にあたる、サの意味についての検討から、観察を始めよう。

#### (1) 語基になりうるものの範囲

「**ーさ**」の語基になるものは、現代語では主として形容詞の終止形語尾イ、あるいは形容動詞の終止形語尾ダを除いた語幹の部分である。

形容詞については相当に広く、形容動詞についてもある程度の範囲の語の語幹が語基になりうることは、母語話者としての内省によっても推察できることである。(注1)

形容詞全般のなかでサの付きうる範囲について計量的に調査した論文として、遠藤(一九八五)がある。これは、形容詞の項目に派生形

を表示している三つの国語辞典を資料とし、三辞書が共通に形容詞として見出し語を立てている六〇九語について、四一六語(六八%)が三辞書とも「ーさ」を派生形として表示しているという結果を得ている。形容詞の七割程度は少くとも、十分なたしかさで「ーさ」を作ることを示している。

この論文は、形容詞の音節数別に、「ーさ」を作らない語を中心に具体的な検討をしている。そして、音節数が少い語ほど「ーさ」を作りやすく、音節数が多い語ほど「ーさ」を作りにくくなるという結論を出している。語形の長さ以外の要因としては、「ほどとおい」のような文章語、「やばい」のような俗語などは「ーさ」を作りにくいという文体的性質からくる制約などもあげられている。そういう制約がなく、また程度の意味の語である限り、形容詞は「ーさ」をもつのが原則だという帰結になると理解される。

遠藤論文は、ダナ活用をする口語の形容動詞についても、「相対的程度性」をもたないもの、一般的に使われない語以外は、ほとんど「ーさ」を作ると概括している。

接尾辞サの語形成力は、右にみてきた範囲をこえて、ごく限られた限界内ではあるが、名詞や副詞にまで及んできている。見坊(一九七七)は、「積極さ」という用例を多数採集し、この語形の成立のプロセスを追究したものである。形容動詞「積極だ」は一般的な語形としては考えにくいものであり、むしろ「整然さ、ゆったりさ」などと同様に、状態を表す名詞や副詞にもサが付き得るといふ語形成様式があるとみるべきで、それによって発生したものと結論に達している。

語種の点からは、和語に比べて漢語や外来語を語基とするものは、「ーさ」に不安定なものが多い。松井(一九八三)は、「懇意さ、本気さ」などを不安定な例にあげ、しかし「気がかりさ、まぢまぢさ」のように和語にも不安定なものがあると述べている。

遠藤(一九八七)は、「ーさ」の使いすぎについて述べた部分で、野上弥生子の「親近さ、成熟さ、活き活きしさ」という造語の例をあ

げるなどして、「ーさ」に頼りすぎる傾向をいましめている。

このように「ーさ」の濫用がよく問題にされるといふことは、ある意味では、この様式の造語力の旺盛さの表れでもあるのではなからうか。

なお、遠藤(一九八七)に述べられているように、「変さ、正反対さ:」とは言わないが、「変さ加減、正反対さ加減:」とは言えるというように、「ーさ加減」は「ーさ」よりも広く成り立つ、ということがある。

すでに述べた範囲の中に属することであるが、サは単純語の形容詞だけでなく、「人なつっこさ、嫉妬深さ、打たれ強さ:」など、複合語の形容詞にも付くことが多い。しかし、この範囲に止まらず、「人間らしさ、アマチュアらしさ、社会党らしさ:」のように形容詞型活用をする接尾辞ラシイにも付く。接尾辞を独立させてしまつて「らしさ」などという名詞が使われることもある。<sup>(佐々)</sup>また、「書きやすさ、発病しやすさ、暮らしにくさ、同化しにくさ:」のように、形容詞「やすい、にくい」が接尾辞化したものにも、サが接尾する。さらに、「会いたさ、愛されたさ、たしからしさ:」のように形容詞型の活用をする助動詞タイ・ラシイの語幹に相当する形にも接尾する。このようにして、サの活動しうる範囲は、狭義の単語としての形容詞の領域を越えて、ずっと広いものになっている。

## (2) 意味からみた「ーさ」の名詞一般の中での位置

「ーさ」は、その使用例を見渡すと、みな抽象名詞の範囲に止まつていて、具体名詞に転用されることがないようであり、これが一つの特徴とみられる。「ーさ」の語基である形容詞などは、人やものという実体の属性、あるいはことがらの属性を表現する語であり、「ーさ」はその内容をほぼそのまま名詞化したものであるから、具体名詞ではありえないことは、考えやすいところである。

「#涼しさ」を贈る」といふCMの中の文句は、「涼しさ」が涼味を

呼ぶ贈答品を指示するが、それを「涼しさ」という抽象名詞で表現したところに修辞効果を求めている。このような比喩的な用法は、もちろん具体名詞化とは別である。

「―さ」はみな抽象名詞の範囲に入る、という非常に大まかな位置づけから一步すすんで、名詞の中のどういう部類に分布しているかについて、どう考えられるであろうか。

益岡・田窪（一九八九）は、日本語の名詞を次のような基本的な意味範疇に分けて考えている。

代表する名詞 疑問を表わす名詞との対応

人名詞	ひと	だれ
物名詞	もの	なに
事態名詞	こと	なに
場所名詞	ところ	どこ
方向名詞	ほう	どちら
時間名詞	とき	いつ

この分類にしたがえば、「―さ」は「こと」に代表される事態名詞に属し、「なに」という疑問詞に対応する名詞だ、ということになる。名詞の意味的な分類で、右よりもやや細分する案として、教科研（一九六四）がある。この案は、名詞全体を具体名詞（ものや人などを示すもの）と抽象名詞（動作・性質・関係などを示すもの）に分け、両者の境界に現象名詞（光、におい、風…）を設けている。具体名詞には、人、自然物などの六類をあげ、抽象名詞には次の八類をあげている。

a	動作・作用	練習	誘惑	ひっこし
b	精神	心配	知識	欲
c	言語作品	名まえ	うわさ	法律
d	性質	美	寒さ	はば
e	関係	縁	原因	条件
f	方角・位置	東	中心	南極

g 数量 三つ ひとり 半分  
h 時・ばあい きのう 日曜 機会

「―さ」が抽象名詞全般のうち、どういう方面に分布するかについて、この分類案にしたがって言えば、「寒さ」という語例があげられている「d 性質」（状態をも含めた静的属性と理解される）に属するものが最も多いであろう。

「性質」以外に、「うれしさ、なつかしさ、やりきれなさ…」など、感情形容詞を語基とするものは「b 精神」に属するとみられる。また、「近さ、遠さ」は「e 関係」にあたるであろう。「a 動作・作用」に属するものは、形容詞を語基とする本性からも、ほとんどあり得ないと思われるが、「わるさ」は「わるさをする」のように「いたずら」を意味するばあいがあり、それはここに所属することになる。

### (3) 「―わ」の意味について

前節では、「―さ」が単語としての意味において、広漠として多岐きわまらない名詞全体の中で、どんな部類に属するかについて検討した。この節では、「―わ」そのものの意味について考えよう。

接尾辞サは、語基である形容詞などの表す属性そのものや属性の程度を表す抽象名詞を作る、とされている。すなわち、品詞を転換することをおもな働きとする接尾辞であって、接辞が加わることによる意味の変化は、実質的なものでなく、形式的なもの、あるいはわずかなものに止まる。

この章の始めに挙げた森田（一九八〇）の規定にもうかがわれるように、サは第一に程度概念の名詞を作る働きが目立っている。「高さ（重さ・長さ・硬さ…）をはかる」とか「百ルクスの明るさ、二十五メートルプールほどの広さ…」のような言い方がごく一般的であることは、「―さ」が数量などの程度やその測定の表現に密接なものであることを示している。

積極さ増した長島／鋭さを増した原の目／山の緑が、ひときわつややかさ

を増している。

というような、「―さを増す」という言い方もよく見られるが、サが属性の程度に重点のある意味になっていると言えよう。

…入籍したときの繁雑さといったらなかった。

なども、程度の高いことを強調する表現である。けれども、

小兵の若浪に簡単につり出されるなど「雑さ」から抜け切っていないようだ。

の「雑さ」は「雑な程度」ではなく、雑である性質の領域をさしている。

彼らは若さや未熟さを売りものにした。

この短詩の面白さとすごさとに高校生が接するのは、よいことである。

などでは、「そういうところ、性質、特徴」を言っている。

さみしさも感じています。／このつらさが他人に分かってたまるか。／肌寒さを感じて、

などの感情形容詞を語基とする「―さ」は、感情や感覚をさしている。これらをまとめると、サは形容詞などのあらわす内容をほぼそのままに名詞化するものである、ということになる。こういう抽象度の高い幅広さが、サのもつ特性であり、また、その広い造語能力の原因の一つになっていると考えられる。「おもみ、あたたかみ…」などの接尾辞ミが、微妙な意味を加えるものであり、非常に限られた語数の範囲にしか接尾しないのと対照的である。

「―さ」の意味に関して、一つの興味ある問題として、反対語の形容詞の意味が特に「―さ」形において中和しやすいとみられることがある。「どのくらい重いのか知らない」のような形容詞の本来の用法においても「重い」が「軽い」に対立する積極的な意味でなく、対立が中和して、目方の意味になっている。(宮島一九七七)「重さが軽い、長さが短い、高さが低い…」のような表現が普通であることから、「―さ」の形ではことに意味の対立が中和しやすいのであろう。

#### (4) 統語的派生について

接尾辞による派生語は、一般に接尾辞によって語全体の品詞性が決定される。句や文についての主要部・補足部という考え方を語の内部構成に適用すると、接尾辞の「さ」が主要部、形容詞語幹などの「―」は補足部である。「美しさ」が名詞であるのは、ひとえにサの特性による。(影山一九九三)

サの接尾してできた派生名詞は、全体が一個の抽象名詞であるわけだ、語基である形容詞が形容詞本来の統語的なふるまいをするようなことはないのが原則である。たとえば、「\*たいへん美しさ」「\*かなり暑さ」のように程度副詞を直接受けることはなく、「たいへんな美しさ」「かなりの暑さ」という連体的な形式をとって名詞句になる。

ところで、時枝(一九五〇)は、

あなたにほめられたさにそんな事をするのです。

のサは「あなたにほめられた」に付いたものであるという例をあげ、私に何か云ひたげにしてゐた。」などの例とともに、日本語の接尾語の特徴を論じた。また、影山(一九九三)は、

遊ぶ金が欲しさに、銀行強盗をはたらいた。

UFOを見たさに、北海道まで行った。

のような多数の例をあげて、サによる統語的派生について精密な理論的追求をしている。ここで一つ注目されることは、ほとんどの例が「……さに」という形式の条件句になっている点である。影山氏はこの構文について「古めかしい響きがする」(註)と述べているが、柳田(一九七七)によると、原因・理由を表わす「くサニ」は中古から中世に成立し、盛行したが、のちに衰退して行った事情が明らかにされている。衰退しながらも、長い伝統をもつ構文なので、現代語でも「古めかしい響き」を伴いつつ慣用句的に用いられることがあるのではなからうか。この「サニ」について、早く湯澤(一九二九)はサと助詞ニが結合して一語化し、接統助詞的になったものという考え方を示し、柳田氏もそれを受け入れている。

右の「サニ」を一応別にして考えると、「一さ」が連用成分を受け  
る例は非常に少なくなる。影山氏の引用された、

菊治は……夫人と会いたさがつのるばかりのようであった。

(川端康成「千羽鶴」)

はその例であるが、やや破格的であるところに、かえってこの文脈で  
の表現効果もたらされているのではなからうか。

右のような構文から格助詞を消去した形ともみられる「こわいもの  
見たさ」は、成語化しており、近世後期から用例がある。

子供かわいさで後継にしたのではない。

という例や、「わが子かわいさ、政権ほしさ、友達ほしさ」のような  
「一さ」をあと要素にした複合名詞は、やや自由に形成される様式に  
なっている。ただし、「一さ」の語基になるのは感情形容詞やそれに  
相当するものに限られるようである。

### (5) 「一さ」とふれあう漢語系接尾辞

「一さ」といちばん拮抗し、ふれあうところの多い漢語系の接尾辞  
は「一度」であろう。「硬度、強度、速度、親密度、寛容度」など、  
「硬さ、強さ、速さ、親密さ、寛容さ」と一応おきかえられる例もあ  
る。「一度」のほうが、程度の意味が明確に表される傾向はあるとみ  
られる。「信頼度、貢献度、アピール度」のように動作性名詞を語基  
とする「一度」は、「一さ」にはおきかえられない。「セクシー度、不  
人気度」などの例から思い出されるが、ずっと以前に「エッチ度、チ  
カン度……」といったようなふざけ半分の造語が週刊誌などに流行した  
ことがあった。

「一性」の一部とも「一さ」はふれ合う。

形式的であり、日本の無責任さ、非道徳性を再確認させるものだ。／軽さ  
や耐久性も工夫／思い切りのよさ、意外性が面白い。

のように両者の並んだ文例もある。「純粋性、確実性、寛容性、必要  
性」などは、文脈にもよるが、「一さ」も大きい差はなく成り立つ例  
である。(「耐久性」を「もちのよさ」と言えば一拍短くなる)

### (6) 「一さ」の語史

前節まで、現代語における「一さ」の性質や特徴について、いくつ  
かの面からみてきたが、そのような「一さ」が成立するに至った歴史  
的な過程はどういうものであるのか。この課題について、筆者自身の  
調査はまだ果せずにいるので、もっぱら先学の業績にたよって記述す  
る。

まず、サの語原は明らかになってはいないが、サマとの関わりが指  
摘されている。早く『名語記』に、「サマを反せばサ也」(註も)という語  
原説がある。また、サは元来は状態の意の名詞で、接尾辞マが付いて  
サマが生じたとも説かれている。(註も) いずれにしても、サはサマのサ  
と同根であることが、有力な意見になっている。

古代語の語構成をくわしく研究した阪倉(一九六六)におけるサに  
ついての考察をみよう。固有日本語の語構成のうち、体言の派生とそ  
の接尾語として、ラ・マ・カなどと並んでサが取り上げられている。

「カシコサ、タカサ、ヒキサ……」のような、形容詞語幹になる語基に  
接する機能はすでにあったが、他の種の語基にも接して「ツブサニ、  
ツカサ(小高い所)、カヘルサ……」などの抽象的な体言を構成した。  
それは、

ももしきの大宮人のまかり出て遊ぶ今宵の月の清佐(萬葉・一〇七六)

のような、いわゆる感動の喚体句を構成するサに通ずるものである。

「さやけし」と叙述する述格に立つ資格を内に含んだまま体言的に定  
着されたものである。形容詞を派生する接尾語シは、/i/母音をもった  
叙述形「し」をつくるが、その情態的、形容的な意義を体言的に固  
定したものが、/a/母音をもつ情態言「さ」の形であったという考え  
を、阪倉氏は示した。サが文語形容詞の語尾シと同じサ行音であるこ  
とは、偶然ではないことになり、興味深い。

「一さ」の全体的な語史の研究はまだないが、万葉集ならびに八代  
集の和歌と、中古の仮名文学作品をくわしく調査して考察した論文、

秋本（一九七六）がある。この論文によって、「一さ」の語史についてかなりの知見が得られるだろう。以下にその内容の一部を摘要させていただくことにする。

この研究では、「一さ」の用法を、体言的、接続語的、述語的、喚体句的と大きく分けている。万葉集では、「一さ」の延べ語数四八のうち、名詞の一般的用法に当たる一例を除いて、他はすべて文末に用いて感動の喚体句を構成する「一さ」である。ところが、八代集では時代順を追って大勢としては喚体句的な用法が減っていき、体言的な用法、接続詞的な用法がふえていっている。接続詞的な用法というのは、

身をわくる事のかたさにます鏡影ばかりをぞ君にそへつる

（後撰集、一三二五）

さびしさに宿をたち出でてながむればいづこもおなじ秋のゆふぐれ

（後拾遺集、三三三三）

のように「一さ」に助詞ニが下接して、接続語的、条件句的に使われる用法をさしている。

「一さ」に下接する助詞が、万葉集には皆無であり、古今集ではニとコソであったのが、後撰集ではニ・コソのほかにハ・モ・カ・ヲ・ノ・ヨと多様化し、助動詞ナリの下接する例もみられ、体言的用法が拡大して、体言性の増大、定着化を示している。

一方、土佐日記から源氏物語に至る十二の仮名文学作品についての調査によると、喚体句を構成する用法は会話文に限られ、地の文には用いられないので、専ら口頭語的なものになっていることがわかる。体言的用法は、修飾語の上接しない、「一さ」単独の用例数が各作品を通じて多いことから、定着していると思われる。接続詞的用法は、作品によって体言的用法より多いもの、少ないものがあるが、地の文より会話文により多くみられる傾向がある。源氏物語に特徴的に多くみられる、

いとかくあらぬさまに思ししほれたる御気色の心苦しさに、身の上はさし  
おかれて、涙ぐみ給ふ。（幻）

のような構文は、蜻蛉日記や宇津保物語の会話文にもみられ、それらを前哨として、仮名文に一般的な表現となった。

上代において、「一さ」は上接句に対して述格に立ちながら、感動的に文を終止する喚体句の機能に始まったが、次第に体言性を顕著に示すようになり、中古にはすでに体言として定着するようになっていたことを、秋本論文は明かにしている。ただ、「一さ」の語幹の部分もつ用言性は根強いものがあり、現代語における「一さ」にも時として表れてくるとみられる。

### 三 「一ち」のもつ、語形成における意味・可能性

右に、いくつかの観点から「一さ」形式の派生名詞について検討してきた。それらをふまえて、この名詞形成様式のもつ造語論上の意味やその発展可能性について、いくつかの項目を立てて考えてみよう。

#### (1) 「一ち」の作り出す体系性

まず、語の作る体系の観点から「一さ」をみることにする。ソシュールの「*enseignement*」を例にした「連合関係 (*rapport associatif*)」(註)の四種のうち、第三にあげられている「*changement, arnement*……にあたるような連想の系列を「一さ」は作り出している。「たかさ、おもさ、さわやかさ、あまさ、さびしさ……」のような多数の「一さ」の系列は、潜在的ではあるが、サを共有することにおいて、形と意味の両面から密接に関係し合っており、体系性を生み出している。また、「一さ」の一つ一つは、「たかい↓たかさ」「さわやかだ↓さわやかさ」のように、多くはよく使われるような形容詞などに直結していて、有契性が高い。こういう性格をもつ「一さ」がさらに生かされて多く用いられることは、日本語の本来もっている造語力が発揮されて、語彙の中に自然な体系性をつよめていくことになるだろう。

## (2) 混種語の「ーさ」

サは二の(1)でもわずかながらふれたように、和語系の語基と最も結びつきやすく、安定した抽象名詞になりやすいことは、いうまでもない。語種別にみると、「ーさ」の全体が和語であるものがいちばん多いことは、動かないところである。しかし、漢語の語基、さらには外来語の語基とも相当に自由に結びついて、混種語をかなり作り出している。

漢語としては、「大切さ、不思議さ……」のように十分日常語化した語ばかりでなく、「非情さ、過激さ、酷薄さ、不透明さ……」のような文章語的な語にもサがあまり異和感なく付いた例が多く見出される。

外来語の例は、漢語より少ないことは当然であろう。遠藤(一九八七)の調査によると、「ーさ」という派生形をいちばん広く認めている『三省堂国語辞典』(第三版一九九〇)は、「タフさ、デリケートさ……」など五十語の外来語の「ーさ」を表示している。また、遠藤氏は右以外に「アナーキーさ、エネルギーさ……」などの用例を見つけている。私が新聞から拾ったわずかな例のうち、「ナイーブさ、ナチュラルさ、ハングリーさ」は『三省堂国語辞典』(第四版一九九二)に表示されており、次の例のみ表示されていなかった。

旅の僧が一軒家で体験したグロテスクさとエロチシズムに満ちた体験を……  
漢語はいうまでもなく、いわゆる外来語も、現代日本語の語彙を構成しているメンバーであることは和語と同様なのであるから、それらが合成的な一語の中でまじり合って混種語が生じることは、ごく自然な必然の成り行きである。サも漢語や外来語と親和性をさらに増して、自由に造語力を発揮していくのではなからうか。

## (3) サに当たる他言語の接辞

形容詞性の語から、特別な意味を加えることなく、おもに品詞性を転換する接辞を添加することによって、名詞が派生する語形成様式は、日本語だけでなく、諸言語に広く存在するものであろうか。

また、翻訳にあたって、サとそれに対応する他言語の要素はどうかわるか。そういう点について、対照言語学的な考察ができるかといのであるが、ここでは筆者の多少なり学習経験をもつ英語などの範囲内でわずかな観察をすることに止めざるを得ない。

英語について、長嶋(一九八〇)は、

明  $\langle$  bright  $\rangle \rightarrow$  明  $\langle$  brightness  $\rangle$   
高  $\langle$  high  $\rangle \rightarrow$  高  $\langle$  height, highness  $\rangle$   
悲  $\langle$  sad  $\rangle \rightarrow$  悲  $\langle$  grief, sadness  $\rangle$

など、約二十例をあげて、

これらの例から、派生パターンとして日本語の「ーさ」には英語の「-ness」が対応することが分かる。いずれも極めて生産的な接尾辞で、意味的にも一般に「当該形容詞の性質・状態を有すること」と規定できよう。

と述べている。

フランス語で、接尾辞  $\langle$  -esse  $\rangle$  は形容詞に添加されて抽象名詞(女性名詞)が形成される。たとえば、faiblesse(弱さ) hardiesse(大胆さ)のように。この語形成様式による女性名詞は、仏和辞典において、どのような日本語訳が与えられているだろうか。手許の『クラウン仏和辞典』(3版 一九九一 三省堂)から、任意に二つの例を引いて、用例などを省き訳語だけを抜き出してみよう。

finesse ①精巧さ、精妙さ、見事さ、美しさ ②感覚・知力の鋭敏さ

③(形、材質の)細かさ/細さ/薄さ ④[複数]微妙な(難しい)点 ⑤狡猾さ、悪賢さ

hardiesse ①[文]大胆さ、勇敢さ ②[文](a)厚かましき、僥越 (b)複数[大胆な振舞い、厚かましい言行] ③奔放さ、独創性

右の二例は、サが特に多用されている項目ではない。 $\langle$  -esse  $\rangle$  語尾をもつ女性名詞に対する日本語の訳語として、サの働きの非常に大きいことはおどろくほどである。これは単語の対訳としての日本語においてということ、具体的な文脈の中では  $\langle$  -esse  $\rangle$  がサに対応することは、より少なくなるだろう。たとえば、右の辞典の中でも、例文の  $\langle$  finesse d'exécution  $\rangle$  は「仕上りの見事さ」と訳されて

いるが、〈finesse d'une broderie〉は「刺繍細工の繊細な出来ばえ」とサを使わずに訳されている。それにしても、サの働きを抜きにしては、多数あるこのタイプの抽象名詞の日本語訳は成り立たないだろう。

わずかな観察にすぎないが、少くとも英語やフランス語には「一さ」に相当するような接尾辞があり、また、それを日本語訳するには「一さ」の働きにまつところが大きいことがわかる。

#### (4) 「一さ」のもつ表現効果

「一さ」という抽象名詞を用いた表現が、どのような表現の特性や効果をもつかということについて、実例を「一さ」を用いない表現におきかえて比較するなどして、検討してみよう。

その寡黙さが彼女たちをやや哀しげに見せている。

レベルの低さが熱せ招く(見)

のような、非情物名詞を主語とする他動詞述語文を成り立たせることに「一さ」が役割りを果たしている。「レベルの低いことが…」でも同じ構文の文にはなるが、間延びした表現になってしまう。「一さ」の形で名詞概念として結晶することの効果がみられる。

日本における布教のむなしさを語ったが(↓むなしことを)

…は激しさを増しそうだ(↓もっとも激しくなりそうだ)

痛さに耐えかね(↓痛くてたまらず)

市内は平静さ取り戻す(見)(↓平静にもどる)

というような、抽象名詞「一さ」を用いた表現は、カッコ内に示したような、それを用いない表現におきかえても実質的な意味はさほど変わらないであろう。そして、「一さ」を用いない表現のほうが、むしろ平明な、年少者にも親しみやすい例もありそうである。しかしまた、「一さ」を用いた表現のほうが、短いひきしまった表現であったり、近代語らしいシャープな感じの表現であったりする例も多いのではないか。このような評価は、表現のおかれたコンテキストによって大きく変わるはずのものであるし、もともと個人個人の好みによって

も違う、主観性の濃いものではあるが。

文脈の上で前に述べたことを「一さ」で要約して指示するような使い方もある。

但し、江戸期や明治初期に日本を訪れた外国人が眼の色を変えるほど、自然は豊かだった。豊かさの中にあぐらをかいた結果、保護や観察よりは仮託を選んだのだろう。

のように、前文を簡潔な形にまとめ、それをもとにして文脈を展開させる働きを「一さ」が果たすことがある。

新聞の見出しには「一さ」の使用例が多いということは、遠藤(一九八五)にも指摘されているが、筆者の採集例でも同様である。一例

をあげると、本文の中には、

「ごはんが少ない、身投げをしたい、つらいという、ふだん思っていた事を全部葉書に書いてしまい」しかられた、という五年男子の日記もある。

とある記事の見出しが、

「つらさ訴え、しかられた」

とつけられている。新聞の見出しは、スペースの制約から一字でも少ないことが要請される場面であろうが、「一さ」は好都合に利用されているのだろう。

#### (5) 専門語としての可能性

現代が最高度に分業の発達した社会であることに伴って、学術用語などの専門語の役割、比重は現代語において非常に大きく、現在、未だの日本語のありかたを著しく規定する。(宮島一九八二)「一さ」がもっている専門語としての可能性をしらべてみよう。

宮島氏の右の調査研究のなかの「専門語の採集」という章において、「複合語」の項に、機械工学の範囲では、

名詞+形容詞語幹+さ

という語構成法のものが目立ったと記されている。たとえば、

アーク長さ すえ付け高さ 加工深さ 切削かたさ 切欠きもろさ

のような例が多くあげられ、「一さ」の前に漢語も外来語も自由に立



ち、混種語をきらう傾向はみられないという。一般の語において、「わが子かわいさ、金ほしさ」のような感情形容詞の例があるが、形式的には同じでも、趣きの違った語形成様式として専門語の世界に生かされていることは興味を引かれる。

近代の日本語において、学術用語を整理統一する目的から編集された文部省の一連の『学術用語集』のなかで、『物理学編(増訂版)』(一九九〇)は、列挙されている用語を語種からみると、予想にたがわず漢語と外来語が大部分を占めていて、「一さ」などの和語の要素は少ない。「第一部 和英の部」から「一さ」を探すと、

モーク硬<sup>々</sup>(Mohs hardness 機械関係) おしのけ厚<sup>々</sup>(displacement thickness 連続体物理) 有効結合長<sup>々</sup>(effective bond length 生物物理 高分子物理) 光学的厚<sup>々</sup>(optical thickness 光学)

のような、右にみた機械工学の例と同様な、「一さ」をあと要素とする複合名詞の形式のものが見出される。「第二部 英和の部」をみると、

length 長<sup>々</sup>(力学) speed 速<sup>々</sup>(力学)  
のように、英語に対応して「一さ」だけがあげられているものよりも、「一々」と並んで漢語などが並立している項目が多い。たとえば、  
strength (1)強度(機械関係) (2)強さ(物理一般)  
hardness (1)硬<sup>々</sup>(機械関係) (2)硬度「水の」(真空、測定技術、科学)(注一)  
stiffness (1)こわ<sup>々</sup>「材料の」(機械関係) (2)フティフネス(音響学)

のように、「一々」とそれに相当する漢語や外来語が、分野などによって使い分けられているようである。

専門語につながる性質をもつ高校・中学校の教科書の用語において、「一々」がどのくらい現れているかについて、国立国語研究所の語彙調査の結果からうかがうことにしよう。(文献7-11)(この調査では、さいわいに接尾辞サは、小さい単位のほうの、形態素的なM単位として扱われているので、語彙表から容易に使用頻度などを知ることが出来る。)

昭和五十年ごろに使われていた、高校の社会科学・理科のうちの九教科一冊ずつの教科書の全数調査の結果をみると、全教科の度数順M単位語彙表でサは使用順位が四位である。全体の語彙量は、延べ三二一〇五八、異なり一五五一九M単位であり、サの使用度数は六三九回、使用率は一・九九%である。接辞的な要素で使用順位がサより上位のものは、テキ(的)、ネン(年)、カ(化)、コク(国)、ダイ(第)、シャ(者)と、いずれも漢語系のものに限られており、和語系のもは、つ(三つ)などの助数詞、七五位)、かた(方、九四位)などがサより下位に現われている。すなわち、和語系の接辞ではサが使用頻度が最高である。

教科別に内訳をみると、次のようにまとめられる。

理 科	度数	比率(%)	順位
物理	529	4.817	19.0
化学	351	12.078	10.0
生物	38	1.463	146.5
地学	45	1.484	127.5
	95	4.079	23.5
社会科学	110	.521	307.5
倫社	61	1.611	87.5
政経	6	—	—
日史	24	0.480	354.5
世史	4	—	—
地理	15	0.441	454.0

右の数字から読み取られることとして、理科系ではサの順位が十九位で、社会科学系に比べて使用率が十倍近いこと、理科系の中の物理ではサの全体順位が十位で使用度数がとびぬけて多いことが右のこの要因であることが、もっとも目立っている。(社会科学のなかでは、倫社が他よりやや高い。)このことの具体的な様相をみると、物理では「大きさ」(一四六回)「速さ」(八一回)「長さ」(三九回)「強さ」(三二回)のように、わりあい少数の形容詞の「一さ」が集中してくりか

えし使われている。(注8)

中学校教科書の調査結果についても、簡略に見ておこう。全体におけるサの使用順位は二六位で、高校のばあいより順位が上である。使用度数は四四六回、使用率は三・三八五%である。教科書別の生の度数だけ記すと、

度数	404	136	186	32	50	42	11	20	11
科	上	下	上	下	下	会	民	理	史
理	1	1	2	2	2	社	公	地	歴
									史

であり、やはり社会より理科がずっと多い。理科四冊のうち、一下、一上が特に多く、一下のなかでのサの使用順位は八位である。一下における「ーさ」をみると、「大きさ」(七一〇回)「速さ」(四六回)「高さ」(二〇〇回)「長さ」(一八回)「濃さ」(一一回)が度数一〇以上の「ーさ」である。(注8)

以上の不十分な検討から、積極的な結論を出すことはできないが、「ーさ」は専門語としてある程度の役割は果しており、その、さらなる発展の可能性もあるのではなからうか。

#### 四 おわりに

動詞や形容詞など、用言の内容をほぼそのままに對象化した抽象名詞が作られることの必要さは、近代語ではとりわけ大きくなっていると思われる。動詞では、「支え、ゆれ、ひずみ、申し込み、伸び悩み」のように、連用形と同じ形がそのまま名詞化される。いわゆる「居体言」である。また、同じ形が「切り売り、上げ下げ、火入れ、流れ作業」のように、造語形として複合名詞の成分になってはたっている。(文献15)

一方、形容詞などで、動詞の「居体言」に相当するものが、右にみ

てきた「ーさ」に他ならない。形容詞などのばあい、造語形は「ーさ」ではなく、「円高、おそ咲き、はで好み」のように「ー」すなわち語幹である。「さ」という一拍の接辞の添加による抽象名詞の単純な形成方法は、長い歴史をもつ日本語本来の造語法として、あまり目立つものではないが、大きい役割をもっていると考えられる。

- 注1 文献16では、接辞の「生産性」ということに関して、サを生産性が高く、「ま冬」におけるマを生産性が低い例としてあげている。(一ページ)
- 2 「らしさ」が独立の名詞のように使われた例として、『らしさ』の心理学(福富護 講談社現代新書797 一九八五)という書名をみつけた。
- 3 文献4の247ページ
- 4 田山方南校閲 北野克亨『名語記』(一九八三 勉誠社)の巻第二(五四ウ)に、「次 詞ニハヤサ オソサナイヘル サ如何 サマヲ反セハサ也 ハヤサマ ヲソサマ也 又シヤノ反 シナノ反 次 ニクサ カヘルサ ノサ 如何 コレメサノ反」とある。
- 5 『時代別国語大辞典 上代編』(一九六七 三省堂)
- 6 フェルディナン・ド・ソシュール 小林英夫訳『一般言語学講義』(一九七五 第3刷)の176ページ
- 7 harness に対応する「かたさ」は、物理学以外に、「硬さ」(土木工学 一九五四)「カタサ」(船舶工学 一九五五)「硬さ基準片、硬さ試験機」(計測工学 一九七三)「硬さ試験」(地震学 一九七四)「硬さ」(原子力工学 一九七八)「硬さ、硬さ試験(機械工学増訂版 一九八五)」「硬さ」(農学 一九八六)「硬さ」(建築学増訂版 一九九〇)と、いろいろの部門の用語集に見られる。
- 8 高校・中学校教科書の語彙調査の資料の閲覧その他について、国立国語研究所の言語体系部の部長中野洋氏と第二研究室の石井正彦氏にいろいろお世話になった。
- 高校物理のなかから「ーさ」の文例を二、三あげると、「速度の大きさが速さである」「水の深さが一様というように」「波動の強さというのようである。倫社には「その自我の弱さを」「人間としての尊さがあり」「正直は、道理に対するすなおさであり」のような例がみられる。
- 中学理科には「糸はどのくらいの重さで切れるといえるか」「二つの力の大きさを二辺とする」「水溶液の濃さ」のような「ーさ」がある。

なお、調査対象である高校物理の教科書『標準高等物理1』（昭和四十九年発行）の著者でもある大塚明郎氏の語られた内容を中野氏から伺ったが、興味をもったので概略を記したい。高校教科書の自立語の語種別語彙量（文獻7の41ページの表）において、和語は延べでも異なりでも物理がいちばん比率が高くなっていることについて、中野氏が、物理はモノとモノとの関係を扱い、基本的な性格をもつという内容そのものにその要因があるかという研究発表をされた。それに対し、大塚氏はそれもあるかもしれないが、平易なことばを使うことに努めたことが大きいのだ、という趣旨を述べられたとのことである。

いうまでもなく、物理学などの知識ゼロの筆者がことばのうわべだけをみているにすぎないので、見当外れの多いことを恐れている。

## 文献

- 1 秋本守英（一九七六）「接尾語「さ」構文の文章史的考察」『王朝』9 中央図書
- 2 遺藤織枝（一九八五）「接尾語「さ」の一考察」『早稲田大学語学教育研究所紀要』31号
- 3 同（一九八七）『気になる言葉 日本語再検討』の「接尾語「さ」の現在」南雲堂
- 4 影山太郎（一九九三）『文法と語形成』ひつじ書房
- 5 教科研（一九六四）教科研東京国語部会・言語教育研究サークル『語彙教育—その内容と方法—』麥書房
- 6 見坊豪紀（一九七七）「新しい名詞「積極さ」の発見」『小松代融一教授退職・嶋稔教授退職記念 国語学論集』
- 7 国研（一九八三）『高校教科書の語彙調査』国立国語研究所報告76
- 8 同（一九八四）『高校教科書の語彙調査II』同81
- 9 同（一九八六）『中学校教科書の語彙調査』同87
- 10 同（一九八七）『中学校教科書の語彙調査II』同91
- 11 同（一九八九）『高校・中学校教科書の語彙調査』99
- 12 阪倉篤義（一九六六）『語構成の研究』角川書店
- 13 時枝誠記（一九五〇）『日本文法口語篇』岩波全書
- 14 長嶋善郎（一九八〇）「第五章 語構成の比較」『日英語比較講座第一巻 音声と形態』大修館書店
- 15 西尾寅弥（一九八八）『現代語彙の研究』明治書院
- 16 益岡・田窪（一九八九）益岡隆志・田窪行則『基礎日本語文法』くろしお出版
- 17 松井栄一（一九八三）『国語辞典にない言葉』南雲堂
- 18 宮島達夫（一九七七）「1語彙の体系」『岩波講座日本語9 語彙と意味』
- 19 宮島達夫（一九八二）『専門語の諸問題』国立国語研究所報告68
- 20 森田良行（一九八〇）『基礎日本語2』角川小辞典8
- 21 湯澤幸吉郎（一九二九）『室町時代の言語研究』大岡山書店
- 22 柳田征司（一九七七）「原因・理由を表わす「〜サニ」の成立と衰退 —「史記抄」を資料として—」『近代語研究 第五集』武蔵野書院